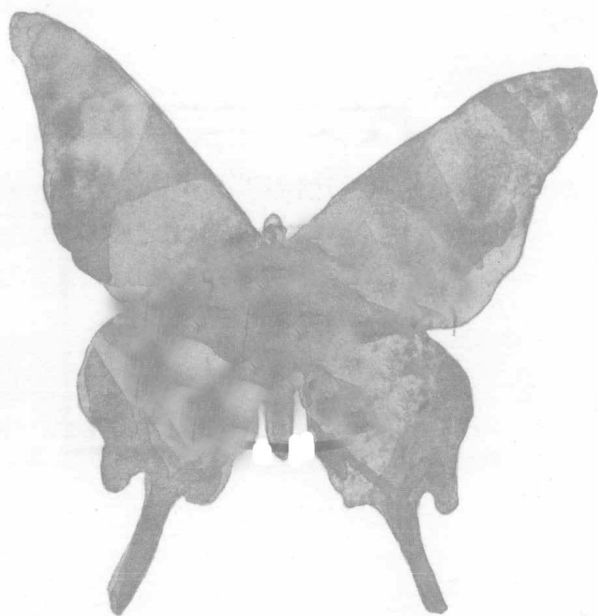




長篇小説

海の蝶  
丹羽文雄



講談社

海の蝶

一九六四年十一月二十日発行

著者 丹羽文雄

発行者 野間省一

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽町

電話 東京九四二局一一一大代表

定価 四六〇円

©1964 Fumio Niwa

落丁本・乱丁本はおとりかえます

長編小説

海  
の  
蝶



## 風のそよぎ

庭の芝生が、明るい黄色で浮きあがってみえた。よく手入れされた、高麗芝である。昼間よりも黄色がやわらかく、明るいのは、応接間のあかりのせいだった。夏間は、うすみどりの絨毯を敷きつめたようになった。実物のふかいみどりが、応接間の光線ではどよくやわらげられるからである。

「芝生の手入れが、大変でしょう」

応接間の客が、女主人の羊子にいった。

「私、野芝が嫌いですの。野芝はしがみついても生きようとして、繁殖力が旺盛でしょう。食糞なくらいですわ。それにくらべますと、高麗芝や、ひめ芝は、手入れが大変ですけど、毛並がよくて、高貴な感じがしますわ」

ゴルフ・コースのグリーンのように、柿本家の庭の芝生の手入れは大仕事であった。陽のあたることと、通風はいうまでもなく必要だが、水はけが悪くては、芝は死んでしまうのである。三尺ほど土を掘り、小石を敷き、その上に土をかぶせる。土も、ありきたりの土ではいけ

なかった。夏間は、朝と夕方に、まんべんなく撒水された。芝ののびさかりの季節には、一週間ごとに刈りとられた。柿本家の庭は、芝生が中心であって、樹木は添えものである。隅の方に、二、三本の立木があった。家庭教師として織田<sup>おだ</sup>正志がこの家<sup>たまし</sup>にきたとき、家の中の豪華な調度品に気押されるよりも、庭のみごとな芝生に度胆<sup>どきど</sup>をぬかれた。ゴルフ・コースのグリーンを見たことのない織田は、そこに自然を感じるよりは、自然がここまで淘汰されたことに感心した。雑犬を見なれている目が、風土によって淘汰された観賞用、愛玩用の優美な犬におどろくのに似ていた。織田はいままさに、柿本家の財力を感じたものである。織田は、学生だった。

「織田君は、いつか、家庭教師の口があったら、アルバイトをやってもよいといってたね」  
教授室に呼び出された織田正志は、電気科の浦上教授にそういわれた。

「べつにアルバイトをやらなければ、やっていけないというのではないのですが、のんきな家庭教師なら、一度ぐらい自分も経験しておいてもよいと思ってたのです。ですから、学生課のアルバイト係には、正式に申込んでありません」

「のんきなアルバイトなら、やってもいいのだね？」

「ええ、やってもよいのです」

一度そんなことを口にした手前、織田は取消すわけにはいかなかった。織田正志は、関西のY市の、親代々からの庭石商の次男であった。下宿生活をしているが、仕送りが窮屈<sup>きうくつ</sup>というのでもなかった。友達の二、三人が、家庭教師をやっている。家庭教師という、ちがった世界に、織田は興味をもった。友達の報告に好奇心をそそられたからである。

「私の知合の家に、来年うちの中学校を受験する子がいる。その子をみてやってほしいと以前から頼まれていたが、適当なひとがなかったので、今日まで返事をしないでいたが、ふと、君のことを思い出したのだよ。どんな学生でもいいというわけにはいかないのでね。ことに、アルバイトで家庭教師ずれのしているのでは、紹介もできないからね」

「遠方ですか」

「小日向台町だよ  
こひなたいまち

「あの、江戸川べりの……?」

「そう、あの高台にある。君の下宿は?」

「新宿区矢来町です」  
やらいちよう

「それなら近い。歩いてでもいける」

「何をしてる家ですか」

「柿本精器の社長の本宅だ。その一人息子だよ」

「柿本礼介氏でしたね」

「柿本さんも、当大学の卒業生だ」

「二、三日考えさせてもらいます」

家庭教師が自分の性に合わないとかわかれれば、辞めるまでだと、織田正志は軽い気持だった。

二、三日と慎重に返事を保留したのは、がつがつしていいところを知ってもらいたいためだった。柿本精器の社長宅と知ったとき、卒業後の就職問題もあり、織田の心はきまった。卒業後、口さえあれば、どこにでも勤めるという気持はなかった。就職先を、あれこれと選択して

いるのだ。そのためのように、日本全国の主要な会社一覧表のような本が出版されていた。会社の内容から、資本の状況、社員の数、社長重役、主な株主の名まで明記されていた。織田はその冊子から、柿本精器の内容を知っていた。

浦上教授の名刺をもって、織田は柿本家を訪ねた。すでに電話で通知されていて、織田はいきなり広い応接間に通された。そこでしばらく待たされているあいだに、庭の芝生のみごとなのおどろいた。夜の芝生の美しさにふたたびおどろいたのは、その後のことである。美しい苔なら、織田もいろいろと見ている。庭石に苔はつきものである。京都の苔寺も、二、三回訪ねた。京都の古い寺の庭も、ほとんど見つくしていたが、高麗芝のみごとさは知らなかった。織田の知っている芝生は、ほとんど野芝のたぐいであつた。二階の階段にひとの気配がした。織田は、ちょっと緊張した。渋い地色の中に大柄な花をあしらった和服の女が、にこにこしてあらわれた。織田は、椅子をはなれた。

「浦上先生から、くわしくお電話をいただきましたわ」

それが、柿本礼介の妻の羊子であつた。織田は花が咲いたようなはなやかな感じをうけた。「どうぞお楽になすって……」

と、自分は差し向かいの、クッションの深い椅子にかけた。その眸が十年の知己のように、微笑していた。

「どうしてもアルバイトをなさらないという境遇ではなかったのですわね？」  
そこまで浦上教授が話をしているのなら、話は楽だと、織田は氣をとり直した。夫人は、彫りのふかい顔立であつた。目が大きかった。比較的口も大きかった。明るい感じの顔である。

織田が印象をうけたのは、夫人がパーマをかけていないことであつた。豊かな、すなおな髪が自慢なのか、それをまん中からきれいに二つに分けていた。髪をまん中から二つに分けるのは、よほど顔に自信のある女の人だと、織田はだれかにきいたような気がする。猫も杓子もパーマをかける時世に、わざと逆をいくというのも、それだけ顔に自信があるからだろう。背の高い方であつた。柿本社長の妻の若さが、織田には意外であつた。が、織田は柿本礼介の年齢を知らなかつた。

「浦上先生におねがいしましたのも、アルバイトをしなければ、食べていけない方でない方が希望だつたものですから」といつてから、口調を変えて、「こんなふうには、アルバイトの学生さんに悪いですわね」

織田は苦笑して、何とも答えなかつた。織田は、上体をまっすぐにのばしていた。学生服のせいもあつた。油っ気のない髪だが、それが織田の若さと、清潔さを感じさせた。二十二歳にしては、どこか子供っぽい感じがあつた。その年齢の学生服では、だれもが似たようにみえるのだが、織田は母親似で、やさしい感じの顔をしていた。夫人には、織田が気に入つたようであつた。浦上教授の紹介をありがたいと思つていたところである。が、本人に会うまでには、多少の心配があつた。話をしていると、その風貌、態度から、何となく育ちもわかり、安心ができた。何よりも織田の若々しさと、清潔さが気に入つた。

「章は、まだ学校からかえりませんが、やがてもどつてまいりますわ。章の勉強室は、二階にございます。勉強室をみて下さいますか」

夫人につづいて、織田は階段をふんだ。四尺幅の階段が、ひろく感じられた。廊下もゆつた

りと出来ていた。章の部屋は、南と東に窓があり、絨毯を敷いた十畳ほどの広さであった。シングル・ベッドがあり、サイド・テーブルがあり、洋ダンスらしいものはめこみになっていた。テーブルも、本立も安物とは思えなかった。ちょっとしたホテルの部屋のようにであった。椅子のセットもあった。部屋の中は、片付いていた。が、織田はこの部屋のどこにも、小学生らしい感じがないと思った。

「章君が、自分で机の上を整理するんですか」

「いいえ、女中がいたしますわ」

わがままで、頭の悪い子供ではないか、という気が織田はした。不安をもった。家庭教師の経験のある友達の話が、思い出される。がむしゃらに教えこんではいけないのである。勉強することを苦痛に感じさせてはいけない。先ずその子の性格をのみこむことである。はじめの間は、子供とのんきに遊んでいた方がよい。友達に出来ることなら、自分に出来ないことはあるまいと、織田は、この勉強室で子供のかえりを待つことにした。

「ぼくは、次男でした。父も母も、祖父も祖母も、長男を大切にしました。めずらしかったせいもあるんでしょうね。二人目の子は、ちっともめずらしくないでしょう。だから、ぼくは、うちの中では兄がいちばん偉いのだと思うようになりました。劣等感というのですか、早くからそんなものを植えつけられました。うちのものは、あんまりぼくをかまってはくれなかったのです。そのおかげで、ぼくはいや応なしに独立の精神を養うことになりました。何でも自分でしなければならなかったのです」

話の途中で、これを皮肉にとられては困ると、織田は気がついた。ひとり子を皮肉ったわけ

ではなかった。夫人は、微笑をうかべて聞いていた。夫人は、話の内容よりも、織田の唇の動きをながめているようであった。

「章が、学校の先生以外の先生につくのは、あなたが初めてですわ。きつとめずらしがるでしょう」

「章君の成績は、どうなんですか」

「それほど悪いというのではございませんけれど、良いともいえませんわ」

「章君と友達になりますよ」

織田には、家庭教師という職業的な気持がもてなかった。羊子夫人と話をしていると、親戚か、知人の子供の勉強をたのまれて、今日はじめ訪ねてきたような気分である。職業となれば、形式的な応酬もあり、窮屈な思いもあるはずだった。自分が図迂々々しいわけではなかった。夫人の方に、織田を気楽にさせる気分があった。夫人の明るい感じが、いったい何から来るのか。顔立からだろうか。それとも、性格だろうか。柿本夫人としての社交性のせいだろうか。夫人の眸には、ひとをひきつける魅力があった。だまっていっても、妙に迫ってくるような感じがあった。そんな扱いをうけて、織田はいい気持だった。

廊下にかけてくる足音がして、扉があくと同時に、

「ただいま、ママ」

「おかえりなさい」

弱々しそうな子供だった。織田は椅子をはなれて、章に笑いかけ、

「今日は」

と快活に挨拶をした。

「ほく、キヌにきいたよ、ママ。先生がいらしたって」

「そう、もうきいたの。今日から、織田先生が章とお友達になって、勉強をみて下さるのです」  
章は、ひとみしりをしなかった。じっと織田の顔をみつめるのだが、警戒のふうもなく、率直な注目であった。子供らしい関心だった。四十歳ぐらいの女中が、章のランドセルをもって、部屋にはいつてきた。

「今日から、章の勉強をみていただく織田先生よ」と、夫人が女中にいい、「こちらは、家事取締役のキヌさんです」ふざけた紹介をした。

女中の二、三人もいそうな家の大きさであった。そのほかにも使用人がいるらしい。キヌと  
いうのが、使用人の監督の位置にあるのだろう。

「ママ、向うへいつて……」

と、章がいった。

「そうね、織田先生とお話なさい。ママは、退散します」

夫人は出ていった。

章は机に肘をついて、織田をみた。織田は、机の方へ椅子をもつていった。

「章君、試験がこわいか」

「こわい？」

そんなふうに感じたことはないようだった。

「来年は、中学校の試験をうけるのだ。小学校の卒業生はほとんど中学にはいれるときいてい

たが、落ちる生徒もいるのかしら」

「十人近くは、よその学校へいきます」

織田の大学は、小学校、中学校、高校と同一経営にあった。幼稚園は、付属であった。小学校にはいれば、そのまま大学まで進学できることになっていた。よほど成績の悪いものが、他校に転じた。高校から官立の大学に移るものもあった。

「章君の五年のときの成績は？」

「五番です」

「全体の？」

「いいえ、組の中で」

「何人ぐらいでひと組？」

「五十人です」

「それじゃ章君は、頭がいいんじゃないか。何も家庭教師をつけて、勉強をしなればならぬという生徒ではない」

「ぼく、中学校の入学試験がどんなものか知らないけど、ママの方が心配してるんです」

「いままでだれに教わってた？」

「ママはみてくれないの？」

「うなずいた。」

「パパは？」

「月のうち半分はいないんです」

「ああ、そうだ。パパは忙しい人だからね。友達は？」

「うちへは、だれも来ないんです」

「どうして？」

「ママが怒るから」

織田は、意外な気がした。子煩悩の母親とばかり思っていた。

「どうしてママが怒るのかしら」

「芝生にはいるからです」

「芝生って、庭の芝生？」

章が、唇をかんでみせた。それは、無念だという表情であった。母親に叱られたことを思い出して、口惜しがっているふうであった。

「立派な芝生だからね」

「靴で歩いて、いけないんです」

「それじゃ、はだしか」

「はだしも、いけないんです」

「じゃ、どうして歩く」

「歩いては、いけないんです」

織田は、おやおやという顔をした。織田は、笑い出した。

「お庭は、ママの自慢です。お友達と芝生で角力をとってたんです。あんまりママがこわい顔

して、叱ったものだから、それからだれもぼくのところへは来なくなりました」

この家の事情がすこしずつわかってくると、織田は、外見の印象だけでは判断が下せないと感じがついた。夫人を見直す必要があった。が、織田は途方にくれる。明るくて、やさしく、美しい夫人の印象を訂正するにはしのびない気がした。おのれが美貌であることを、十二分に意識しているような女性だが、その美しさは客観的にもみとめねばならないのである。が、夫人の美貌と子供とは、関係のないことだった。

「庭であそべないとなると、章君は学校からかえってきて、どこであそんでいるのか」

「ここにいるか、菅原さんのところか、源さんのところです」

菅原というのは、自家用車の運転手であり、源さんは、六十年配の男衆であった。

「この勉強室にはいって、感心したんだけど、きれいに片付いているね」

「ツルやが片付けるんです」

ツルという十七歳の女中のほかに、ヨシと呼ぶ二十二歳の女中がいた。

「章君は片付けたことがないのか」

「ツルやが、みんなしてしまっただもの、ぼくの片付けるものがないんです」

ツルは、キヌに掃除を命じられているようであった。女中はつとめのひとつを行っているだけであり、そのことが章の性格にどのような影響をあたえるかということは考える必要はなかった。織田は、自分の少年時代を思った。弟なるが故に、自分のことは自分でしなければならぬと思ひこんでいた。昔々の物語だが、東北の貧困の農家では、次男や三男が生れると、親によって殺されたということである。間引きといわれていた。くらしがさらに苦しくなるとい

う理由からであった。次男三男の扱いには、今日でもなお、間引きに関係のある感情が生きているのではないか。が、織田の家族がとくにかれに冷淡であったというのではなかった。そういう土地の風習にすぎなかった。織田はいつか、この話を章にきかせてやりたいと思う。

「先生も土曜日の晩のパーティに来るんですか」

「パーティ？　ここにあるの？」

「ママが主人役です。いろんなひとが集まります。みんなママのお友達です」

「男のひとや、女のひとが来るのか」

「男のひとばかりです」

「パパもいっしょ？」

「パパは、ひと月の半分はいません」

「それは、おどろいた」

「パパは、パーティの仲間にはいません。パパの仕事に関係のないひとばかりです」

「パーティでどうするの？」

「お酒をのんだり、レコードをきいたり、お話をしたりして、夜おそくまであそんでいます」

「章君もはいるのか」

「とんでもないと、大人びた表情で章が否定した。

「夜がおそくなるからだろう」

「ママはパーティにぼくがはいていくと、面白くなるんでしょう。いやな顔をします。ぼく、パーティが嫌いです」